

SDG s 目標達成のために学校図書館が果たす役割 教材としての新聞の重要性

学校司書（神奈川県在住）
倉橋 麗子

はじめに

この 2, 3 年で SDG s の認知度はめざましく上昇し、世界各地で目標達成への機運が高まっている。私は公立中学校で学校司書をしており、選書や新聞記事のスクラップを作る業務も行っているが、2015 年に国連で採択されてからしばらくは子ども向けに書かれた SDG s 関連書籍は数える程であった。記事を収集しようと新聞を開いても SDG s という単語もなかなか見つからなかった。現在本は次々と出版され、新聞ではニュースを SDG s と関連付けて報道するようになったためか、切り抜きをすると記事の山ができるほどである。学校図書館での調べ学習の授業も多くなり、生徒の意識に SDG s が根付いて来ていることを実感する。勤務する中学校では生徒会が活動のテーマに掲げて全校で色々な取り組みを行っている。中学生の関心が高いのは、身近にある「ごみ問題」、「食品ロス問題」などの「大量消費・大量廃棄」、SDG s で言うと 12 番の目標『つくる責任 つかう責任』である。この目標を達成するには「エシカル消費」の実践が不可欠である。

そこで、消費者として、また持続可能な社会づくりの担い手として、中学生がこの「エシカル消費」を学ぶにあたって、学校図書館として果たせる役割について私の提言を述べてみたい。

学校図書館と新聞配置の現状について

2020 年度から実施されている新学習指導要領では学校図書館を活用した学びが盛り込まれている。しかし、文部科学省の調査によると 2020 年 5 月現在、学校図書館の運営を担う学校司書が配置されている国公立中学校は 64.1%で、自治体によって格差があったり、1 人の学校司書が複数の学校を掛け持ちするケースもあるのが実情だ。また、公立中学校で生徒の閲覧用に校内に新聞を配置している学校は 56.8%、学校図書館への配置は 46.6%で、平均 2.7 紙である。前回 2016 年の調査より増加しており、NIE（教育に新聞を）の取り組みが進んでいることがうかがえる。学校図書館は「読書センター」、「学習センター」と並び「情報センター」としての機能が求められている。電子版の普及により紙の新聞を購読しない家庭が増加していることを考慮すると、生徒が学校図書館で新聞を閲覧できる環境は十分とは言い難い数値と言えるだろう。

コロナ禍で生徒 1 人に 1 台の端末が配備されるなど、学校においてもデジタル化が進んでいるが、急速に変化する社会情勢の中、信頼できる正しい情報を得る手段として、また、読み比べることで幅広い視野で物事を捉える力を養うためにも、複数紙を閲覧できる環境整備は急務であると考えられる。さらに、学校司書を未配置の自治体などには早急に配置を検討していただきたい。

学校司書の立場から見てみると、コロナ禍で教員の方々には通常業務に加えて、生徒 1 人 1 人の

心身の健康観察、消毒作業、ICT の研修などもこなさなければならない状況にある。

新聞を学校図書館に置き、学校司書が管理、記事の収集を行うことができれば授業での利活用も増えていくことであろう。もう既にそうしている学校もあるだろう。私自身も含め、学校司書のほとんどは非正規雇用で、勤務時間が限られている場合が多い。実際私も手が回らず、数日分ためてしまうこともしばしばである。しかし、目を通さず処分することは絶対にしない。時間が経ってでも必ず目を通す。重要な記事、生徒の目を惹きそうな有用な記事を見逃したくないのである。強く思っていることがある。それは、せっかく新聞を置いていても活用されなければ意味がない、宝の持ち腐れにしてはいけない、ということである。

提言：「エシカル消費」を学ぶ場として学校図書館の利活用を、教材として新聞の活用を。

学校図書館に複数の種類の新聞を配置し、学校司書が記事を収集することの意義、重要性について、私自身の学校司書としての経験を踏まえ次の2点のポイントを挙げたいと思う。

1. 記事の収集はテーマを細分化して行う

「SDG s をテーマに1分間スピーチをする」という3年生の国語の授業で、その題材探し及び調べ学習のため学校図書館が利用されたことがあった。授業での利用は残念ながら大抵1コマか2コマ程度である。常時直近1か月分保存しており、予め授業で使用するとわかっている場合には切り抜きはせず、後で切り抜けるようメモだけ残しておくことにしている。しかし1か月分の膨大な記事の中から生徒が自分の見たい記事を見つけ出すのはかなり大変な作業である。新聞をめくっているだけで50分の授業が終わってしまいかねない。当時も新聞記事のファイルを作成していたが、環境問題の分野では「プラスチックごみ問題」「気候変動」「エネルギー問題」「食品ロス」・・・というように、大まかな分け方でしか作っていなかった。ところが、いざ授業をやってみると、生徒の着眼点は非常に多様で、見たい記事が多岐にわたっていて十分な対応ができたとは言い難い状況であった。記事探しの時間をかけさせたくない、内容を読むことに時間をかけてほしい、そのためにはどうしたらいいのか・・・たどり着いた答えがテーマを細かくして収集することだった。例えば世界中で叫ばれている「再生可能エネルギー」ならば次のように分ける。

「太陽光発電」「水素エネルギー」「アンモニア」「風力発電」「地熱発電」「燃料電池車」etc.

クリアポケットに片面使用済み用紙の白い面を台紙にして、大きい記事は折り畳んで入れていく。ファイル作りに多くの時間は割けないので、体裁は気にせず、とにかく日付と新聞社名がわかるように保存する。ファイルの数は増えるがその分記事を手にする生徒も多くすることができる。記事探しの時間が短く済めば、1コマの授業内で調べたい事柄についてより理解を深めたり、蔵書を使って調べたりするところまで行ける可能性もある。仮に時間が足りなくなっても、昼休みに図書館に来れば、ファイルはいつでもそこにあり、自由に使うことができる。

2. 記事の収集は長期間継続して行う

SDGs 関連書籍は現在続々と新刊が出ており、色々な切り口でわかりやすく、詳しく解説されている。しかしながら情報の新しさにかけては新聞にはかなわない。授業やメディアを通じて『誰一人取り残さない』という SDGs の理念や 17 の目標については既にある程度の浸透が果たされた今、選書の基準や記事の収集も前進していく必要がある。中学生の中には実際に行動に移している生徒、または自分も何かしたいと考える生徒もたくさん出てきている。『自分事』として捉えるようになることが目標達成には欠かせない。その際に重要な指針となるのが、課題解決へのプロセスを知ることだ。国や自治体、企業がどのような取り組みを始めたか、研究開発を進めているか、個人の実践例の紹介など最新の情報を伝えるのが新聞である。しかし、ある 1 時点の記事だけでは課題の全体像は掴めない。課題発生の経緯や経過も見ながら、最新情報に行き着くようにしたいのである。

実例として、数年前からよく取り上げられる恵方巻や衣服の大量廃棄問題を挙げる。2019 年に発刊された書籍に「大量消費・大量廃棄」を生むコンビニとアパレル業界が抱える悪しき経営体質の実態にメスを入れる衝撃的な内容のものがある。もし、今生徒がその本だけを読んだなら、両業界に対し、無責任でけしからんという印象を抱くに違いない。しかしこの問題以降、例えばコンビニは恵方巻やクリスマスケーキといった、その日を過ぎたら販売できない季節性の商品を予約制にするなど課題解決に向けた取り組みを次々に打ち出した。記事にもなっているためファイルに入れてある。この本を読んだ生徒がいたなら、「この本の後日談の記事が新聞ファイルに入っているよ。」と必ずアドバイスをする。それが可能なのは、その本の購入を決め、或いは読み、その後の記事を切り抜いた同一の人間だけなのではないだろうか。

記事の収集を長期間、継続して行うことに重点を置くのには理由がある。世界で ESG 投資の傾向が高まり企業の動きが加速している。出版から時間が経過した本だけでは現在の状況を正確に把握することはできない。中学生には「大量消費・大量廃棄」からの脱却へ舵を切った社会や企業の動きに是非とも注目してもらいたい。本と新聞両方を活用することで問題の根底から見つめ、解決に向けどのような対策がとられたか、実例をたくさん知ってほしい。そこから多くの気づき生まれ、『自分事』へと変わっていき、社会参画へとつなげて行ければ、その調べ学習の意義は大きいものとなる。

「エシカル消費」は環境問題だけではなく、児童労働、人権侵害、貧困、飢餓、差別など、SDGs のいくつかの目標にまたがっている。おしゃれに関心の高い年代である中学生には特に衣服の購入に際し思いを巡らせてもらいたい。背景を知らなければそれも難しい。本や、作成した新聞ファイルで調べれば、2018 年、イギリスの高級ブランドがそのブランド価値を守るために大量の新品を廃棄していると報じられたことが発端だったことがわかる。世界中に衝撃が走り、大量廃棄が日本を含む世界レベルの問題であることが発覚した。当時の記事を読み返すと、その後のアパレル企業の動きがよくわかる。環境保護に逆行するアパレル業界の商習慣への批判が高まると、メーカーは店頭で回収 BOX を設置。リサイクルされて安心かと思いきや、依然、ごみ

として埋められたり焼却される衣服が1日当たりトラック130台分に上るという今年6月の記事が伝える数値に愕然とする。燃やせば当然CO₂が発生し、温暖化の原因となる。ならばリサイクル技術はどうなっているかと目を向けると、2020年7月の記事では世界の繊維生産の半分を占めるのは石油由来のポリエステルで、合成繊維からポリエステルのみを取り出すのは技術的に難しいと報じている。しかし2021年に入ると、古着から高品質のポリエステルを生産し、何度でも再生できるサーキュラー・エコノミーを可能にする新興企業の技術により、百貨店や多くのアパレルメーカーがこの企業と提携し、サステナブル・ファッション推進を図っているという記事が見つかる。他方ポリエステルそのものを作る繊維メーカーも動いている。石油を使用しない100%植物由来のポリエステルの試作に成功したとの記事がある。「エシカル消費」というタイトルの付いた新聞ファイルを1冊見るだけでこれだけの事を知ることができる。テーマごとに、複数紙に渡って継続して収集した記事が、価値のある資料として生徒に手に取ってもらえれば嬉しい限りである。

おわりに

中学生はその後の進路を考え始める段階に差しかかる。「エシカル消費」を学ぶことは、「環境への負荷が小さい素材の開発者を目指したい」「人権に配慮した仕組みを提案できる仕事に就きたい」など、将来の進路への道筋となる可能性もある。現在の中学生が日本のみならず世界に貢献できる人材となって活躍できるよう、できる限りのサポートをしていくのが学校図書館の使命であると思っている。

参考資料

- ・文部科学省 令和2年度「学校図書館の現状に関する調査」の結果について
(令和3年7月29日)
- ・2020年2月22日 日本経済新聞
- ・2020年7月08日 日本経済新聞
- ・2021年6月03日 読売新聞
- ・2021年9月24日 日本経済新聞

審査委員長のコメント

一時点の問題意識に留まるのではなく、その後のプロセスを複合的に見ていく姿勢、「消費者としての視点」を伝えたいという思いにあふれた提言で高い共感を得た。ネットで新聞記事を検索することに対する優位性について言及されると、さらに良かった。